

## 秋葉古道の成立過程と果たしてきた役割などの研究\*

A study on the formation process and historical function of old Akiha Road

中根洋治\*\*, 奥田昌男\*\*\*, 可児幸彦\*\*\*\*, 早川清\*\*\*\*\*

By Youji NAKANE, Masao OKUDA, Yukihiko KANI, Kiyoshi HAYAKAWA

This paper presents the formation process and the historical function of an old Akiha Road located in the northern part of Hamamatsu city. The said old road is one of the Akiha Roads and a ridge road led through the southern part of Akashi Mountains with over 50km in length. This old ridge road has been deeply related to the Akiha faith and frequently utilized during the Edo period (1603-1867). Therefore, the history of Akiha faith is also examined in this paper. This old Akiha road had been utilized by people for the purposes of making a pilgrimage, megalithic faith, transporting obsidian since the primitive age, practicing the mountaineering asceticism, that was prosperous in the Kamakura era, operating the military activities in the warlike age, transporting salt from coastal area to mountainous area, etc.

### 1. はじめに

全国各方面から、秋葉（あきは）神社へ参拝に向かう秋葉道あるいは秋葉街道と呼ばれる経路がある。それらの中から、静岡県浜松市や掛川市方面（遠州）と、長野県飯田市や諏訪市方面（信州）を結ぶ秋葉古道を研究の対象とする。この両地域を結ぶ交通は、後述のように原始時代からあったわけだが、その道中は、天竜川の深い谷と赤石山脈の険しい山岳に阻まれ、昔から秘境といわれた所である。

秋葉山は「火の神」としてかなり古くから広く知られている。現在まで続く秋葉信仰の広がりや、秋葉神社によると北海道から鹿児島県までに及ぶ。

各方面からの秋葉街道は、図-1に示すようなものである。北方からは諏訪市方面にはじまり、中央構造線沿いに来る道が、途中で飯田市からの小川路峠越えの道と合流して南下する。南方からは、静岡県御前崎東方にある相良港からの「塩の道」と重なってくる。東京方面からは、静岡市から山間部の川根方面を経由してくる道もあった。「愛知県方面からは、約十方向から集まってい

る」<sup>1)</sup>。その各方向の先はさらに別の県外にまで至るので、ほぼ全国から参詣者があつたと考えられる。

それらの経過地は勿論のこと、各集落にある秋葉山の常夜燈や道標は、そこがかなり昔から信仰の通路として利用されていたことを示している。このように各地から多くの秋葉道者（どうじゃ）といわれた人達が参詣していた秋葉山であるが、秋葉神社の関係者に神社の経歴を聞いても良く分からないことが多かった。これがこの調査のきっかけの一つとなった。

江戸時代以降の秋葉街道については、参考文献2)3)4)などによって、既に発表されている。これらの多くは、図-1、2にあるように御前崎方面の相良～秋葉神社を経由し、前不動～下平山～西渡（にしど）～水窪～長野県へ至る塩の道ともいわれている経路である。しかし本論文では、秋葉山～赤石山脈の尾根を山住神社経由で県境の兵越峠～長野県へ至る、中世以前までさかのぼった古道の成立過程と果たしてきた役割などを考察するものである。

### 2. 秋葉信仰と秋葉古道

#### (1) 序章として登山路（参道）

まず、秋葉山（写真-1）の麓から秋葉神社へ至る登山路から説明を開始する。（図-1参照）

登山口となる南麓の下社（しもしや）から秋葉寺（しゅうようじ）まで旧来の表参道を歩いて登ると、片道約2時間の道のりである。付随して「秋葉寺へ1838（天保9）年に常夜燈代10両寄付した」という、岐阜県可児郡御嵩町の伊佐治敏家にある古文書の事実確認をしながら参道

\* Keyword: 秋葉古道、尾根道、秋葉信仰

\*\* 正会員 昭和コンクリート工業（株）

（〒450-0002 名古屋市中村区名駅3丁目26-19）

\*\*\* 正会員 奥田建設

（〒468-0004 名古屋市中村区梅が丘3-1412）

\*\*\*\* フェロー会員 工博 日本コンクリート工業(株)

（〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-11-21）

\*\*\*\*\* フェロー会員 工博 立命館大学理工学部

（〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1）

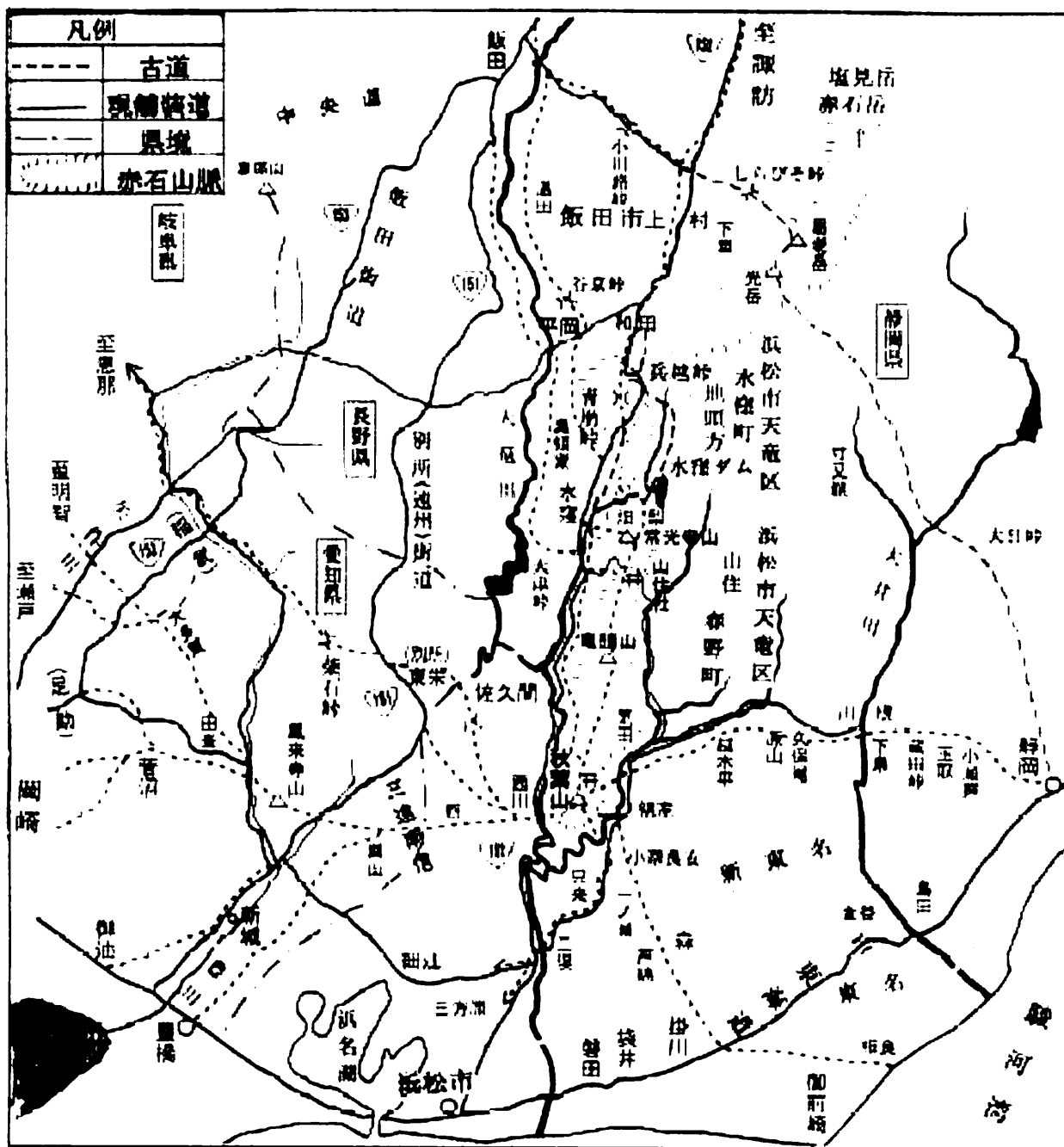


図-1 各秋葉街道広域図 (作成：中根、2008)

の調査を行った。伊佐治家は御嵩町の代表的な庄屋であった。なお、秋葉神社と秋葉寺の関係については後述する。

浜松市天竜区春野町領家字坂下の参道登り始めにある赤い橋は、浜松から九里離れた所に架けられていることから「九里橋」と名付けられた。手前左側は旧「大村屋」という気田川の船宿、その先の「仲屋」は参拝者の宿屋であり、現在の主人に聞くと、「J R 東海道線が開通後には三河の人達が沢山泊まったと言われた。

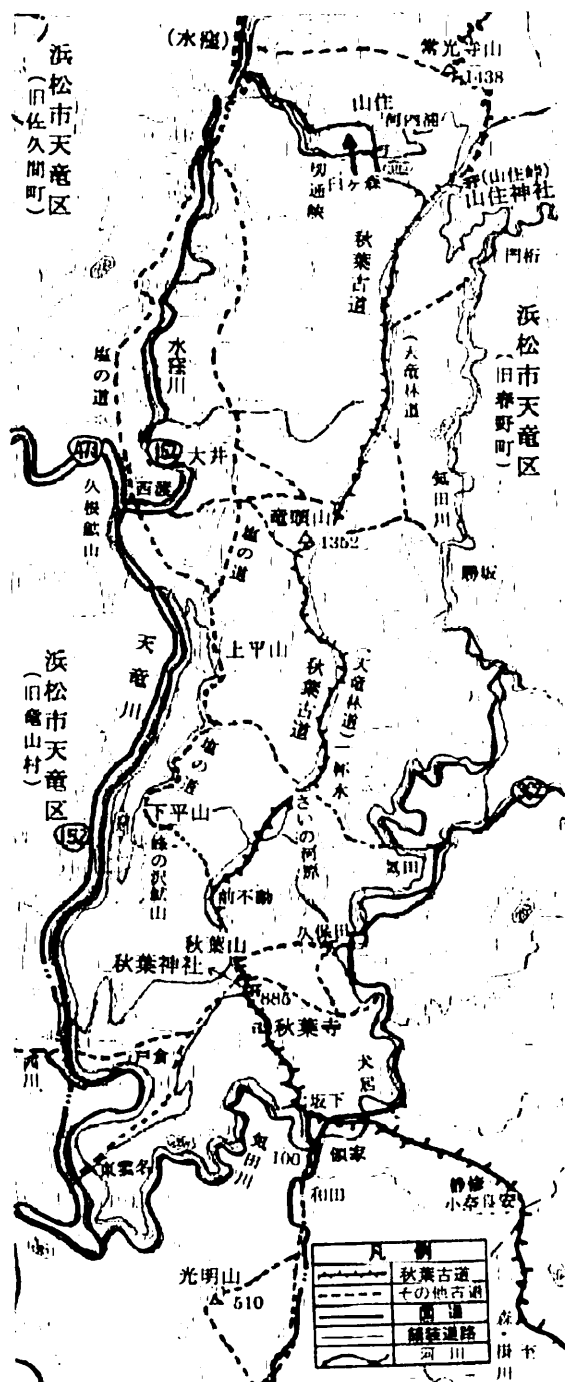
麓の標高は約100m、標高160mにある常夜燈の刻字に依れば、江戸の三河屋によって寛政年間に建てられている。因みに気田川（けたがわ）の舟運はここから約10km上流の気田までであった。南から来ると秋葉山への参拝者は、

1926(大正15)年に秋葉橋が出来る前は渡し船を利用し、馬は川の中を歩いた。この参道が「塩の道」でもあった。つづら折れを登ると、1町(約100m)ごとに小型の常夜燈があり、その銘は嘉永5(1852)年が多い。三重県の津や愛知県の吉田(豊橋市)などの有志が奉納している。

途中には、三河屋・栗田屋・富士見屋・桜屋などの茶屋跡があり、往時の旅人の多かったことを示す。これらの多くは、1943(昭和18)年3月の大火で焼失したとされている。また、参道は樹齢60～80年ほどに見える榎(サワラ)の植林の中を通る。五合目付近にある子安地藏は安産を願う所といわれる。小安地藏の近くにも左右一対の段付き常夜燈があり、上部は崩れているが、下部には「尾州名古屋・文化年間」の刻字がある。



写真—1 南方の光明山から見た秋葉山  
(撮影：中根、2007.9.9)



図—2 秋葉古道拡大図 (アルプス社「静岡県地図」  
1/20万, 2006, を拡大・加筆)

道中一箇所だけ伐採してあり、海に見える位置になる。そこからさらに尾根道を登り、「信玄岩」といわれる岩と石仏を経て秋葉寺の山門に至る。ここは標高700m余、麓から45町目(約4.5km)である。この山門に1855(安政2)年銘の額がある。これは一の鳥居に掲げる予定であったものが明治期に掛けられたものである。ここにある仁王像は身の丈3mほどの大きなもので、色は少しはげているが極彩色である。右側の仁王像の足下に「愛知県鳳来町巢山」という木札がある。つまり、ここの仁王像は旧鳳来町で言い伝えられているように、同地区巢山の高福寺から運ばれたものということが分かる。秋葉寺は1880(明治13)年に再興され、1886(明治19)年頃に仁王が運ばれて本堂に存置し、1951(昭和26)年にこの山門ができて仁王を内蔵している。

山門付近には、藤枝市の吹屋町(鍛冶職人の町)・鍛冶町などの職人集団が奉納した常夜燈がある。山門をくぐって秋葉寺境内に入ると、その左右には常夜燈の基礎のみが残っているが、その上部が無いため、奉納者の確認が出来ない。秋葉寺下方にある表参道の途中にも、人為的に壊された常夜燈の類が目立った。

秋葉寺から標高885mの頂上の秋葉神社までは、徒歩約20分の急坂である。現在、秋葉神社の歴史を物語るものはほとんどなく、せいぜい神社の周囲に生えている樹齢600年ほどと見られる杉の木々のみのように見える。江戸時代の本殿への参道両側には常夜燈がビッシリ並んでいたそうだが、古い常夜燈の類は度重なる火災と、明治初頭の廃仏毀釈の影響もあると思われるが、現在では、神社付近には一つもない。ただし、神社東方約200mにある随神門付近のみには数基残っている。

## (2) 秋葉神社と秋葉寺

秋葉寺の縁起書を基に調べると、秋葉信仰の奥の院とされる竜頭山には、聖観音菩薩を奉じた大登山霊雲院があったとされている。後に、ここへ勝坂不動や勝軍地藏も安置された。そのため、後述のように、平安時代から刀剣の奉納記録がある。そして竜頭山の山頂付近は、古代からあったと思われる自然崇拜と共に、鎌倉時代を中心に山岳修験道の道場でもあった。

秋葉山の山頂には、後述の南北朝時代に後醍醐天皇の皇子である宗良(むねなが)親王の城があったといわれる。その後、「火防の神としての古い記録には、戦国時代に小田原や越後などへ三尺坊を分神した」<sup>5)</sup>とある。三尺坊という僧は、真言密教の修行の後、中世に北陸の方から来山し、火消しの力を持つ天狗になったという。それで、秋葉信仰の中心が山脈南端の秋葉山へ移され、杉の太木が茂ったものと考えられる。南端へ移された理由は、竜頭山は急峻で平地が少なく、比較的広い秋葉山の頂上が人里に近く、適地に選ばれたと思われる。秋葉信仰の拠点、秋葉三尺坊大権現と呼ばれていたが、後に「秋葉大権現」(秋葉山秋葉寺)といわれた(権現は仏が化身して神として現れたこと)。

中古以来、神仏混交のため、秋葉大権現の中には寺と神社が混在していたが、明治時代になると、神仏分離・廃仏毀釈の令により山頂の寺は撤去された。1872(明治5)年に住職が入寂し、その時点では当局に無住と判断され、無住の寺は廃寺するという方針に沿われたのである。そのため、本尊は袋井市の可睡済へ運ばれ、山頂には改めて1873(明治6)年に、火の功用が御神徳である秋葉神社が建てられた。秋葉神社は、1901(明治34)年3月、1943(昭和18)年3月、1950(昭和25)年3月の三度も火災に遭っている。

下社というのは、1943年の火災により同年臨時に麓へ建てられたもので、現在の山頂にある秋葉神社は1986(昭和61)年に再建され、上社(かみしゃ)と呼ばれている。一方、今までであった寺は再建を許され、本尊が戻された。伝統が続いた秋葉山秋葉寺(写真-2)は、かつての表参道を上社より南東へ歩いて下りて「杉の平」という所に位置する。火防の精神が込められていたせいか明治時代以降一度も焼失していない。



写真-2 秋葉山秋葉寺(撮影:中根、2007.12.16)

「秋葉山頂上には犬居城とは別派(家康側)の天野氏の秋葉城が、延元年間(1336~)からあった。この城は南朝後醍醐天皇の皇子宗良(むねなが)親王のために築かれた」<sup>6)</sup>という記述もある。城の位置としては山脈の南端であり、好位置である。

「大登山霊雲院に安置されていた勝軍地藏は、武士の身代わりになる、味方を勝利に導く、とされて武士から熱烈な支持を受けた。そのため、足利尊氏も信仰し、多くの武将からの刀剣や武具の寄進があり、あまり多いので里で売られたこともある。秋葉山の秋葉寺は、山岳修験の真言密教であったが、永禄年間(1558~1571)に曹洞宗可睡斎の末寺とさせられた。家康は山岳修験道の修験者(山伏)を使い、情報を得たという話はよく知られている。当山の別当(統括者)光播は、1570(永禄12)年上杉謙信と連絡をとり家康と同盟を結んだ。これに怒った武田信玄は、秋葉山に1571(元亀2)年に火を付けた。1603(慶長8)年駿河田中藩の酒井忠利家臣らが登山した。その後、1810(文化7)年と1860(安政7)年にも焼失」<sup>7)</sup>などとあり、武将との関係が深い。なお、武将が奉納

した刀剣については後述する。秋葉寺の火祭りは毎年12月15・16日の夜に行者や僧職の手による火渡り他が行われ、秋葉神社の火祭りでは同16日に「弓・剣・火」の舞が順次くり広げられる。

現神社西方の歴代住職墓地を見ると、光播の次の光達(こうたつ)の墓碑名は「通峰光達」になっており、この人は建物の改築を重ねた人と伝えられ、戒名からしても峰々を走り回った人と想定される。

上杉謙信は地元長岡市(旧栃尾市)へ、家康は小田原市板橋へ、犬居にいた天野氏は静岡市(旧清水市)へそれぞれ秋葉信仰を分神した。このように秋葉信仰は全国各地へ広まったとされる。

「1685(貞享2)年、信者の団結力を恐れた幕府から、秋葉祭の禁止令が出た。同年、袋井市の春日明神主が隣地の火災の時に盛んに秋葉山を祈念したところ、火災を免れた。それで神供と共に幟(しほ)を建て祭典を行ったところ、幕府の方針とは逆に一般人の秋葉信仰が急激に盛んになった。この年から全国からの参詣が増えた」<sup>8)</sup>という。そしてこの頃から秋葉山は最盛期を迎え、東京の秋葉原をはじめ、全国各地に分祠された。「北は千葉県から南は岡山県まで講が106地区で設けられ、参詣の折りは定宿が決められていた。一方、寺領としては秋葉山地の両側13地区で、その中に修験関係法印が最盛期には36院あり、僧職関係者が282人いた」<sup>9)</sup>といわれ、秋葉山周辺は秋葉信仰一色に固められていたことになる。

### (3) 秋葉信仰の原点

#### a) 「焼畑農業の火」

この秋葉古道の奥に後述する山住神社があり、一般に縄文時代からの焼畑農業を守る「山犬の神様」といわれている。「猪やウサギ・鹿などの獣から荒らされるので、焼畑農業では焼畑を守る山犬が大切にされた。その焼畑農業の山犬の神と対比されるのが、焼畑で使う火の神であり、この火の神が秋葉信仰の元」<sup>10)</sup>とされる。水窪方面で盛んに行われていた焼畑農業は、原始時代から昭和30(1955)年頃まで続けられていたことになっている。

「秋葉大権現は『火防(ひぶせ)の神』ともいわれるが、『火防せ』とは焼畑作業の延焼防止のことである。延焼防止作業は木の棒で叩いて行われた。焼畑には春焼きと夏焼きがあった。焼畑農家は『お犬様留守番をしておくんない』といって、神札を焼畑の中へ立てた。また、塩を好む山犬を恐れた塩商人も山住神社をお参りした」。<sup>11)</sup>このように、元々の秋葉信仰の火は、古代からの焼畑と関わる火防であり、それより北方の山住神社は焼畑農業の豊作を願うものであった。

山犬とは狼のことである。「東北では狼を恐怖の対象とみただけでなく、神とあがめた地域も多い。狼が人を襲ったことも多かったので、狼の災厄が無いように祈る祭りがあった。また他方では、狼のことを御犬様(山犬)と呼んで、農作物を食い荒らす鹿や猪などを捕食する有り難い存在でもあった。秩父市の三峯神社が狼信仰の総

本山で、火難と盗難よけの神社ともされている」。<sup>12)</sup> また、同じ春野町内の春埜山大光寺、岐阜県恵那市串原の中山神社、長野県駒ヶ根市の光前寺なども山犬を祀っている。このように人々から恐れられた狼は、農作物を守る守護神ともなっていた。

#### b) 「冶金の火」

「山頂から北方へ行ったところに銅鉾山があった。この銅の原石を索道で天竜川まで降ろし、船で運んでいたのが峰の沢鉾山である。この鉾山は秋葉山北西約2kmにあり、1669（寛文9）年幕府が採掘し、1969（昭和44）年閉山した。また久根鉾山は秋葉山北方約10kmにあったが、1731（享保16）年採掘～1970（昭和45）年閉山という稼働状態であった。これらの記録以前の古代からも銅の採掘が行われていたらしい。それは712（和銅5）年、諸国の調・庸は銅銭が可能になったこと、また713（和銅6）年には甲斐の国からも銅の産出が記録されていることから推測される。『火の神』秋葉大権現は、銅精錬の炉に火が入った時を期して祀られた。秋葉の火祭りには、最近まで鍛冶屋さんが多く参拝した。」<sup>13)</sup> 坑道は埋められたが、両鉾山跡は今も認められる。久根鉾山は元巨人軍の江川投手の出身地でもある。冶金の火と秋葉信仰とが関わってきた年代はよく分からないが、昔から鍛冶屋や工業の火を扱う職業の人達のお参りが多いという。例えば、下社に長さ4mほどの十能が掲げているが、これは1954（昭和29）年に静岡県島田市の鉄工所が奉納したものである。つまりこれらは、“よい銅や鉄が出来るように願うと共に、火事にならないように”と願ったものと思われる。なお、鉾物と山伏の関係も深いといわれる。

「秋葉神社の御神体は『火之迦具土神』だが、これは古事記に登場する『火の神』である。梵語の中に阿耨尼（あぎに）という火の神があり、ここから秋葉の『アキ』がきたのではないか。『ハ』は場所を表す。火を使う作業といえば、農業・鉾業・製鉄・陶器などがあるが、ちなみに、我が国で銅の生産が盛んになったのは、和銅年間であり、年号も和銅となっている」<sup>14)</sup> とのことである。秋葉山の名称を考えると、アキハのアは冶金、キは祭祀場所、ハは銅地名を表すという説もある。

「秋」という字は「虫害をなすズイムシ・ハクイムシを火で焼くこと」<sup>15)</sup> とある。「アオキという植物は別名アキバとかオーキバといわれ、木の葉を焙って貼ると火傷の葉になり、またこの葉自体（肉厚）が火伏せの役目をする」<sup>16)</sup> という。いづれにしてもアキハは火に関わる古い言葉と考えられる。

秋葉信仰の拠点には、前述の勝軍地蔵の関わりから、合計400余振りの刀剣が奉納されていた。これらの中で主なものを挙げる。まず、「源頼義が1062年の『前九年の役』の後に三条小鍛冶宗近の太刀を奉獻した。後に第二次世界大戦の供出と、昭和18年の大火により大半は失われた。現在残るものの中、鎌倉期が12振り、その他『岡崎正宗』は武田信玄、『備前長船』は1534（天文3）年山

本勘助、加藤清正、なども刀剣を奉納している。」<sup>17)</sup> これらから分かることは、1062年の時点で既に秋葉信仰の基が始まっていたことになる。

#### （4）神体山をつなぐ

秋葉古道といわれる尾根伝いの道は、別に「信州街道」、「塩の道」、「大祝道（おほほうりみち；古代諏訪神社の神人達が巡った信仰の道）」、「東国古道」、「奥の院街道」、「峰道」、「国峰道」（修験道の道）、「秋葉の棒道」などともいわれ、遠州と信州を結ぶ多目的の通路であった。その中でも、不透明な信仰の原点を探ることによって、秋葉古道の歴史の一端即ち神体山のつながりが明らかになるとと思われる。

ここでは原始時代からの「山や巨石の信仰」に触れ、その頃からこの秋葉古道を人々が往来してきたことを明らかにする。

##### a) 竜頭山と修験道

「この尾根の道は、修験道以前の土着信仰に関係する」<sup>18)</sup>。土着信仰とは地主神ともいわれるが、一般に山・岩・火・天体などの自然崇拜であり、特にこの稜線では巨石信仰を含む山岳信仰が主であると考えられる。原始的な山岳宗教とは、人が死ぬと秀麗な山（神体山）の磐座（いわくら）といわれる巖かな岩から魂が昇天する、と考えられた原始時代から神社が出来る（仏教伝来後の8世紀前後が多い）までの信仰である。

一般に、修験道は原始的な山岳宗教（精霊信仰）と密教が結合したものとされる。山岳宗教は、それ以前の山や磐座の信仰を引き継いでいる。

天台宗は9世紀初めに最澄が広めたが、ここにも千日回峰など修験道の苦行と似たものが現在まで行われている。山岳修験道は一般に8世紀初め、役行者（えんのぎょうじや；利修仙人の兄）が始めたといわれるが、秋葉山付近では鎌倉時代に盛んであったといわれる。修験者（山伏）はこのような中、一般人では及ばないような心身の鍛錬をして宗教的呪術を行い、里の住民から困り事の相談を受け、開発に対しては山を呪文により清めた。また、お札や護摩の灰などを配付して住民の気持ちを鎮めた。同時に、山岳で採れる鉾物や薬草あるいは、お茶・塩なども斡旋し、芸能（後述）の伝播にも一役かっている。さらに山伏は山武士ともされ、尾根を利用した山を駆けめぐることが得意なので、武将が情報収集などに利用したこともある。明治維新による文化改革により、修験道は明治5年に廃止された。

秋葉寺の「奥の院」は竜頭山（写真－3）であった。「奥の院」ということは、一般的に元々の寺社の場所ということから、ここでも竜頭山が秋葉寺の元（神体山）になると考えられる。現在でも、竜頭山の西からの登山口に奥の院を示す石柱がある。

竜頭山の標高は1352mで、頂上に続く南側の岩群の場所にはかつて祠があったといわれる。そこは現在、四阿のある付近であり、祠があったということと、岩群の様

相からここは磐座の可能性が強い。つまり、竜頭山が当初の聖地であり、後に赤石山脈の南端である秋葉山へ秋葉寺が移されたと考えられる。



写真－3 常光寺山から望む竜頭山（最南）  
（撮影：中根、2007.10.29）

また、その南側に絶壁がある。この絶壁は、東視き、や七十五膳供献岩などの修験道場に使われたとされる。（写真－4）その他、飛岩には上下2本の突き出た岩の間隔が5mほどあり、この間を飛び越える修行をしたようである。さらにその近くには、役の行者の仏像と共に座禅岩もある。



写真－4 竜頭山南側の岩壁「七十五膳供献岩」  
右下に石仏あり（撮影：中根、2007.9.8）

前述のように秋葉山は、平安期の頃から武將に信奉された勝軍地蔵があったので、「1685（貞享2）年、爆発的に参詣者が増えた時に、数ヶ月の間に鏡が2,251面と刀97振りが奉納された」<sup>190）</sup>という記録もある。さらに「古代から秀麗な山を信仰する民俗的なことと関係する。それから、秋葉神社の位置する所が、熊野本宮・京都の賀茂神社などと同様、川の合流点にあり、俗界と遮断された楔ぎがなされた後に、辿り着く事の出来る聖地である。焼畑農耕と結びついた火の信仰が、越後からもたらされた秋葉信仰（秋葉三尺坊）とが接ぎ木され、力強く根付いたのである」<sup>200）</sup>という説明もある。これらの他にも川の合流点にある古社は全国に沢山ある。

「金光明嶺と呼ばれた秋葉山が不滅の浄火を灯していたので、遠州灘を航行する舟人から夜間でも親しまれ（目印にされ）てきた」。<sup>211）</sup>各地にある「秋葉山常夜燈」（写真－5）は集落の中心に多いが、夜間の往来者に対する目印でもあった。因みに、近県にある秋葉山常夜燈の最古のものは、岡崎市の甲山寺秋葉堂にあり、1747（延享4）年銘である。



写真－5 岡崎市細川町の秋葉山常夜燈  
（撮影：中根、2008.1.4）

「戒光院のあった場所の裏に、1715（正徳5）年、秋葉寺の奥の院が建立された。」<sup>221）</sup>という記録もある。竜頭山中腹の天竜林道沿いになる現地には二段になった石垣が残っている。

以上のようなことから、秋葉山から竜頭山までの秋葉古道の歴史は、原始時代から鎌倉期の修験道が盛んであったころまで遡ることができると思う。

#### b) 山住神社と常光寺山

山住神社は、前述のように狼を祀る神社といわれる。そして、山住神社は709（和銅2）年に瀬戸内海の大山祇神社から分神されたという（山住神社縁起書）。つまり、山住神社と書いてもその元は山祇（やまずみ）神社と同じ系列の神社と考えられる。（写真－6）



写真－6 山住神社（撮影：中根、2007.10.29）

大山祇命は「山の神」の主でもある。山住神社の歴史を物語るものの中に、境内に2本ある杉の巨木がある。太い方は実測幹周りが845cmあり、現地の説明板では樹齢1300年といわれる。この樹齢を神主に聞くと、伊勢湾台風で倒れた同様の年輪を数えたのだそうである。このような巨大杉を擁する山住神社の「奥の院」は、修験道の時代よりさらに古くからの信仰を集めた山と考えられる。鎌倉秀雄現宮司から「常光寺山は山住神社の奥の院である」と聞いたので、常光寺山（標高1438m、写真-7）へ行く。



写真-7 南から見る常光寺山(左の平地が高天原)  
(撮影:中根、2007. 10. 29)

山住峠（標高1107m）からすぐに、奥の院から昭和61年に移された「常光神」という4㎡ほどの祠がある。その祠を通り越して「家老平」の駐車場から出発し、原生林の山道を約2時間歩いて二つ目の峰に、高さ8mあまりの「赤岩」（写真-8）と呼ばれる岩壁が東向きにある。朝日に映える好条件である。

岩壁全体は赤く、所々黒いから金属混じりのチャート質と考えられる。岩壁前面は広く平地になっていて、住民が祭祀の出来る地形である。岩の正面から見ると、前述の内容の他にも、天辺が滑らかで巨石信仰に値する形状であり、「鏡岩」の部類になると思われる。常光寺山は、この頂上付近が真っ赤な岩石地帯である。この赤い岩石は、その岩石の色から名付けられた赤石山脈の延長上にあることを示す。

この「赤岩」の上部を越した西隣の峰が常光寺山の頂上であり、そこには小祠があるが、これが元々の常光神（奥の院）であると説明されている。<sup>23)</sup>

山頂から麓を見ると、山住神社は真南に位置する。奥の院から南麓に現在の神社があるという配置は、他の神社でもよくある事例である。そのようなことから、常光寺山も愛知県の鳳来寺山と同様、原始時代からの巨石信仰と神体山であることが想定される。「赤岩」は「鏡岩」と同様な扱いをされていたから、山の名前に常光という文字が入り、また一時期、山頂から200mほど西の肩にある高天原に寺があったといわれるので、常光寺山という名前になったと考えられる。なお、高天原の崖に祠があるが、そこには修験道と関係深い役行者と蔵王権現があ

るので、その祠は修験道に関わるものと考えられる。



写真-8 赤岩（撮影:中根、2007. 10. 29）

「秋葉山の信仰は常光寺山から移ってきて江戸時代に著しく発達している。山の背の道は秋葉参詣以前の修行者の道である」<sup>24)</sup>という柳田国男説がある。つまり、常光寺山の「光」の信仰が南の平地に近い秋葉山の方へ集約されて、「火の神」信仰となり、後述する光明山が「水の神」として対比されたと考えられる。

昔、修験道の行場（回峰路）は、西麓の河内浦（こうちうれ）に代々住んでみえた山住宮司宅から、身を清めてから出発しなければいけないとされた。山住宮司宅は莊園の成立以前からの旧家で、5000ヘクタールの山林と二つの集落を持っていたといわれたが、今は無人である。山住神社山緒書きによれば、「徳川家康が山住神社に刀剣を奉納している（1576年2振り、1614年1振り）。また、1733（享保18）年落雷により火災、1879（明治12）年建て替え」とあり、重視されていたことが分かる。

#### c) 秋葉山と光明山

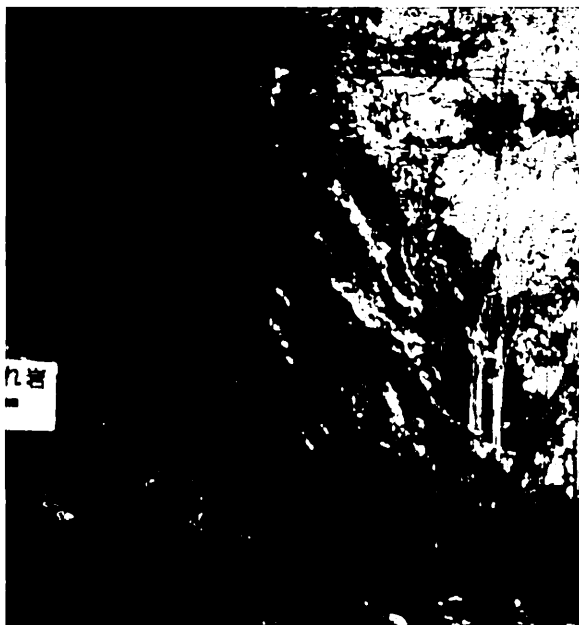
街道の話から外れるが、常光寺山の赤岩と関わるので、秋葉山から気田川を隔てた南の光明山（標高540m）の鏡岩を巨石信仰の事例としてあげる。記録に残る江戸期の旅は、光明山と秋葉山は対であり、参拝者の多くは光明山の方を先に参拝したといわれている。なぜ光明山がそんなに有名であったのであろうか。実は、巨石信仰と関係があった。戦国期から秋葉山は「火の神」であり、光明山は「水防の神」とされている。この山には「鏡岩」があるから「光明山」であり、その別名が「鏡山」となっているのであろう。この山を「水防」に結びつけたのは火防の秋葉山に対して後からこじつけたように思われる。

「鏡岩」とはどんなものか、「鏡」は原始人から恐れられ、弥生期には神聖視された。人の善悪も写し出し、悪事をはたらいた人は黒く写るとされた。また今まで犯した罪や穢れを鏡に写して、鏡岩の上から投げ捨てる滅罪

の効果を願った。これは現代、各観光地の崖の上で行われる“かわらけ投げ”に名残がある。」<sup>25)</sup>などとしている。このようなことから、愛知県の鳳来寺山では高さ60m・長さ100mほどの岩壁があり、江戸期まで鏡の奉納が多かった。また現代、鏡は測距儀や航空写真測量にも使われているが、古代でも鏡は測量に使われたということが考えられる。

「光明寺へは南北朝時代の後醍醐天皇の皇子である宗良親王が、1337（延元2）年に参拝した。当寺は戦国時代に焼失したので、1623（元和9）年には将軍秀忠が再建した。1931（昭和6）年、庫裡の煙突からの出火によりまた焼失した。」<sup>26)</sup>という。光明寺の場所は城跡でもあり、現在、光明寺遺跡と称されている。

鏡岩は、寺跡から北方へ30分ほど歩いた山頂近くにある。高さ約6m、長さ約40mの岩壁（写真－9）である。



写真－9 光明山の鏡岩（撮影：中根、2007.9.8）

そのほぼ垂直の鏡岩は東方を向いており、岩質は秋葉山と同様な鉱物を含む茶褐色の岩である。鏡岩の先には岩壁に囲まれ、「奥の院」とされたお堂の跡がある。その後、南方に広い土地を求め、その名も「大鏡山光明寺」が出来たという事になる。

東方を向いた鏡岩は、太陽を意識した重要な鏡岩であったと思われる。鏡岩（岩壁）信仰は、滋賀県の「日吉神社」や三重県熊野市の「花の窟」が有名だが、愛知県には「鳳来寺山」を初め多くの鏡岩（岩壁）信仰がある。<sup>27)</sup> 鏡岩も磐座や金勢信仰・環状列石等と同様に原始巨石信仰である。

以上をまとめると、常光寺山や竜頭山・光明山にある原始時代からの巨石信仰は、焼畑農業や冶金と結びつき「火の神」を赤石山脈南端の秋葉山へ設定したようである。したがって、当時からの秋葉古道には人々の往来があったことになる。

#### （5）信仰の道・秋葉古道

一般に近世以降の秋葉山への道は「秋葉街道」といわれ、この「信仰の道」は、前述したように、もっと古くからの道を受け継いだ部分があると考えられる。「秋葉山への表参道は、東海道の掛川市～森町～犬居から山頂へ登るルートであった。この中、森町三倉～犬居までを例にとると、尾根の道から谷底の道へ5回ルートが変わっている。こういう状況を道の『下降運動』という。」<sup>28)</sup>。こういう「下降運動」という状況は一般的に多くの街道に見受けられるが、これは江戸時代以降、世の中が平和になって戦いも減り、荷車や牛馬車・自転車などの車両が出現したために、徐々に勾配の緩やかな谷底のコースが選ばれたことによる。<sup>29)</sup>

飯田市では、中央道に沿った一番高い県道が、「上道（うわみち）」あるいは「伊那街道」といって最も古く、現在の幹線は最も低い三段目になる。そしてその道を含め、市内各地に秋葉山を示す道標や石碑が沢山ある。例えば、飯田市の「鳩ヶ嶺八幡宮」（やわたさま）の前の道標には、「右しもじょう・左あきは、宝暦十年（1760）」と案内されている。

図－1に示すように、飯田市方面からは「小川路峠」（標高1490m）を越えて行くルートが有名だが、その他に天竜川左岸を下って温田（ぬくた）～谷峠～水窪の道、さらに天竜川右岸を下って平岡～大津峠～水窪を経ていく道などもあった。

このように、一般的に江戸時代以前の古道では、高い尾根道を選ぶ例がほとんどであった。山頂の秋葉神社は麓から50町目（約5km）にある。北へ尾根を約15km行つた竜頭山を経て、山住神社から水窪へ繋がる秋葉古道は、信州への古道で「塩の道」としても使われた。現状ではこの秋葉古道の沿線に住居は見当たらず、遠方に東西両側の山並が見える。

江戸期以降は、秋葉神社から2km余北へ行つた「前不動」から天竜川溪谷中腹の土平山まで下りて、図－1、2のように土平山径由で水窪へ行く道が、利用者が多かった道であった。大正時代の地図によれば、掛川～森～秋葉山～土平山のルートは県道であった。

太平洋沿岸から信州へ行くルートは天竜川沿いに進めばよいと一般的に思われるかもしれないが、天竜川沿いの道筋は大変蛇行していて急峻のため、歩くことが出来なかったとの事である。

1978（昭和53）年に戸倉から秋葉山まで、1980（昭和55）年に東雲名から秋葉山までやっと車道が開通している。秋葉古道は、1984（昭和59）年に出来た天竜林道の中、秋葉山以北にはびこっている。この天竜林道は現在、山住峠を越えて水窪ダムの方面まで続き、天竜林道として観光道路化している。

山頂の秋葉神社から先へ歩いてみると、第2・第3駐車場（43町目）から久保田古道（JR東海道線が出来る前までは、主に東京や静岡方面から秋葉山への古道）分

岐点を経て、「前不動」→36・39町目石→天竜林道を横切り西側の山へ→久保田からの現在の舗装道と交差→その先は真っ直ぐ山へ入ると「さいの川原」（写真－10）に至る。



写真－10 「さいの河原」碑の右が秋葉古道（撮影：中根、2007.10.15）

「さいの河原」は、昔この付近の行き倒れ人（7人）を葬った所で、礫を積み上げた塚が尾根の皿状地形にあり、樺の大木3本もある。また、3体の石仏が北側の山腹から見えている。「さいの川原」なる石碑は、1787（天明7）年に新城の人が建てたという銘がある。この碑は盆地の南端にあり、盛土状態の秋葉古道の脇に立っている。

「さいの河原」碑→「一杯水」碑は峰道の数少ない水場。こちらの石碑は天明7年にこれも新城の人が建てた。一近道して山を越える→ほぼ現道沿いに進む→八尺坊祠の分岐点に至る。八尺坊とは家康の長男信康の別名であり、ここで生きのびて山伏になったという伝説がある。

八尺坊祠→尾根→戒光院跡を通る→ほぼ天竜林道沿い→山住神社駐車場手前、ここから従来の秋葉古道の説明では山腹を降りて、水窪の町へ下りるとされている。駐車場手前は山住峠近くだが、そこから山腹を下りていくと、やがて家康腰掛け石（写真－11）を通る。



写真－11 家康腰掛け石付近の尾根道（撮影：中根、2007.12.8）

家康腰掛け石→山住宇河内浦という谷底の集落に至る。この山腹を降りる標高差約600mの道には、勾配が60度ほどの急坂もあり、この道では武田軍の騎馬隊が通過するには急過ぎて困難と思われ、せいぜい歩兵である徒組の通路であつたと思われる。

その先の切り通し溪谷は、両側が絶壁の地峡のため、再び坂を上り、北側の山腹を通った。つまり、山住宇河内浦から宇田ヶ森の高いところを通っていたが、明治・大正期の道は崖の中腹にある高さ・巾とも1.8mほどのトンネルのある道（写真－12）を通り、いずれも次の沢で現道へ合流。昭和期に入って現在のような川沿い道路になり、1954（昭和29）年に拡幅し現トンネルが出来て、河内浦まで車道が開通した。河内浦～山住峠→門桁までの県道は1965（昭和40）年に開通した。そして、切り通し溪谷→水窪の町→青崩峠→信州へ至るようになった。



写真－12 崖中腹の旧道、正面左奥にトンネル、右下は現県道（撮影：中根、2007.12.9）

ところが、最古の道は、山住峠から尾根伝いに常光寺山径由で、信州へ向かう道があつたと考えられ、このルートは「戦いの道」で後述する。

信仰の道としては、概略について最初に述べたが、ここでは方向別の交通量について記す。「1772（明和9）年ころ、戸倉～西川の天竜川渡し（鳳来寺方面）は年間25,000人で銭16貫文、他の堀之内～領家と東雲名～西雲名（南方の浜松・掛川方面）は銭1貫文の収入であつた（4貫文は金1両）」<sup>30）</sup>。秋葉山への参詣者は、この他、参道に残る常夜燈の寄進者、あるいは秋葉寺に聞いても、愛知県方面が断然多かったことになっている。一方、「天竜川を利用した通船が1636（寛永13）年に伊那から下流に始まり、これを利用した秋葉詣でもあつた」<sup>31）</sup>。そうである

### 3. 秋葉古道の他の役割

この秋葉古道のある赤石山脈南部は、秋葉山の登り口から県境の青崩峠(標高1082m)・兵越峠(標高1168m)までの距離が約50kmある。秋葉古道を説明する場合、時代と目的・出発地などによってルートを変えて語れない複雑さがある。それは秋葉古道が、信仰とは別の様々な役割を歴史の中に果たしてきたからである。

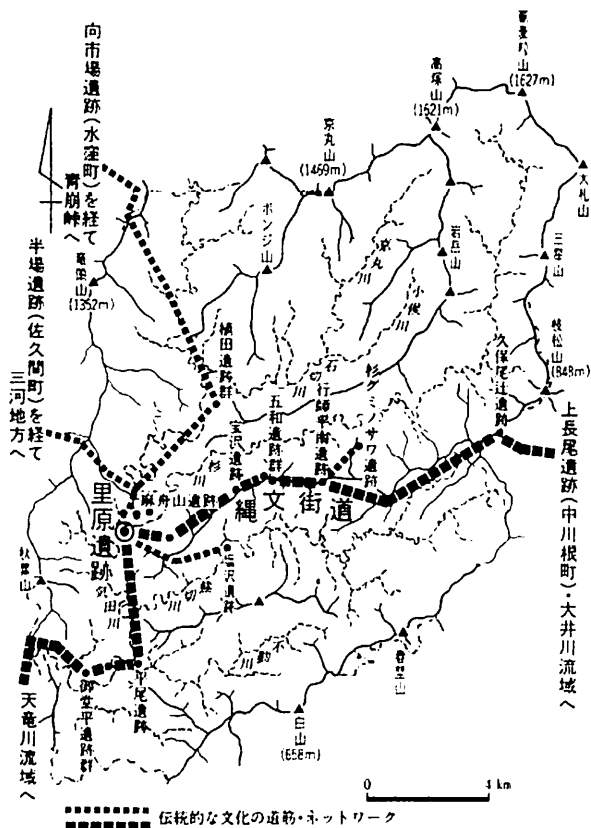
#### (1) 黒曜石の道

春野町坂下付近の原にある、縄文時代の「御堂平遺跡」や気田小学校南の「麻舟山遺跡」などから、長野県の諏訪湖北方にある和田峠産の黒曜石が見つかっている。

浜松市役所文化財担当の佐藤氏によれば、「旧浜松市内の中区蛸塚町四丁目の『蛸塚遺跡』・西区雄踏町の『長者平遺跡』・北区都田町の『川山遺跡』などの縄文遺跡には、和田峠産の黒曜石が多い。」とのことである。

石器時代から和田峠産の黒曜石が各地へ運ばれたが、それは長野県国道153号の治部坂峠の遺跡からも発掘されており、尾根の道が使われていたと思われる。縄文人は主に山腹や山麓で生活していて、焼畑農業や狩猟生活をしていたことが多かったといわれる。秋葉神社所在の山頂から石斧が出土している<sup>32)</sup> ことから、縄文人は尾根の秋葉古道を往来していたと考えられる。

秋葉山のある浜松市天竜区春野町域の縄文遺跡群は「里原遺跡」を中継基地にした道筋を形成しており、『春野町史』では図—3に示す縄文遺跡のネットワークを「縄文街道」と仮称している<sup>33)</sup>。



図—3 縄文街道(原図:『春野町史通史』上巻、1997)

この縄文遺跡の各々から和田峠産の黒曜石が出土している。そしてこのコースは、熊切川と杉川の間の尾根を通るものであるから、縄文人は渡河部の少ない尾根のルートを多用していたことが分かる。尾根の道は、さらに獣に対して有利であり、湿地が少ないなどの便利さがある。この縄文街道筋は、図—1に示す静岡市～川根～越木平～秋葉山とも重なっている。このルートは歩く場合に近道なので、JR東海道線が出来たまでの関東方面から来る秋葉詣での道であったともいわれる。

秋葉古道北部の山住神社から真っ直ぐ北進して、地頭方にある水窪ダム(33戸水没)方面から兵越峠へ向かう尾根の古道もあった。このルートについては後述する。また、常光寺山を西進して水窪の町を経由する尾根の道も利用されたが、地形が急峻のため馬の通行は無理であったと考えられる。

#### (2) 塩の道

前述の信仰の道はまた古くより塩を代表とする生活物資の運ばれた道でもある。また翡翠(ひすい)の産地で有名な北陸の姫川流域からも、この中央構造線に沿って来る「塩の道」が使われたことであろう。

生活物資はこれらの他にも各種あったが、山の幸や海の幸の種類は時代によっても大幅に異なる。例えば、男の丁髷(ちょんまげ)や女の日本髪を結う「元結い」は、江戸時代まで飯田の名産であった。その他、挽物(木地師の製品)や漆器・こけら(柿杓き用板)・鉱石などが山の幸である。平地からは塩・瓶・酒・砂糖・茶など各種あった。

「『秋葉街道』とも呼ばれるこの道は、秋葉山のために拓かれたのではなく、相良・御前崎の海まで続くのだから秋葉より古い信州街道と呼ばれる道である。」<sup>34)</sup> ということは、秋葉古道は秋葉信仰より古いことを意味しているのである。

さらに、本研究の北端である水窪に関しても、「信州と遠州の中継基地とされ、1564(永禄7)年には月に6度の市を開いた」<sup>35)</sup> といわれる。塩をはじめとする生活物資は、途中の平山や水窪の人家のある所を通って、商売をした方が得策であったと考えられる。

#### (3) 戦いの道

戦乱は古代から続いているが、いつの時代の戦争でも、どの道を通ったか分からないことが多い。

南北朝時代、この付近は南朝方であった。秋葉山頂の秋葉城は前述のように、後醍醐天皇の皇子宗良親王のために天野氏によって築かれたとされる。その後、秋葉城は麓の犬居へ移された。

戦国時代における秋葉山の表参道から尾根を兵越峠や青崩峠の方へ行く道は、武田軍による「秋葉の棒道」ともいわれる。1568(永禄11)年、武田信玄のもと、秋山信友が2千人を率いて秋葉古道から犬居城へ入っている。その後、信玄はこの道を二度通ったといわれている。一度は1571(元亀2)年3月の高天神城を攻めた後、犬居城

を経て高遠への帰途、二度目は1572（元亀3）年10月10日、徳川家康との三方原戦へ向けてである。山住神社から北方への古道には、図-4のようなルートがあった。

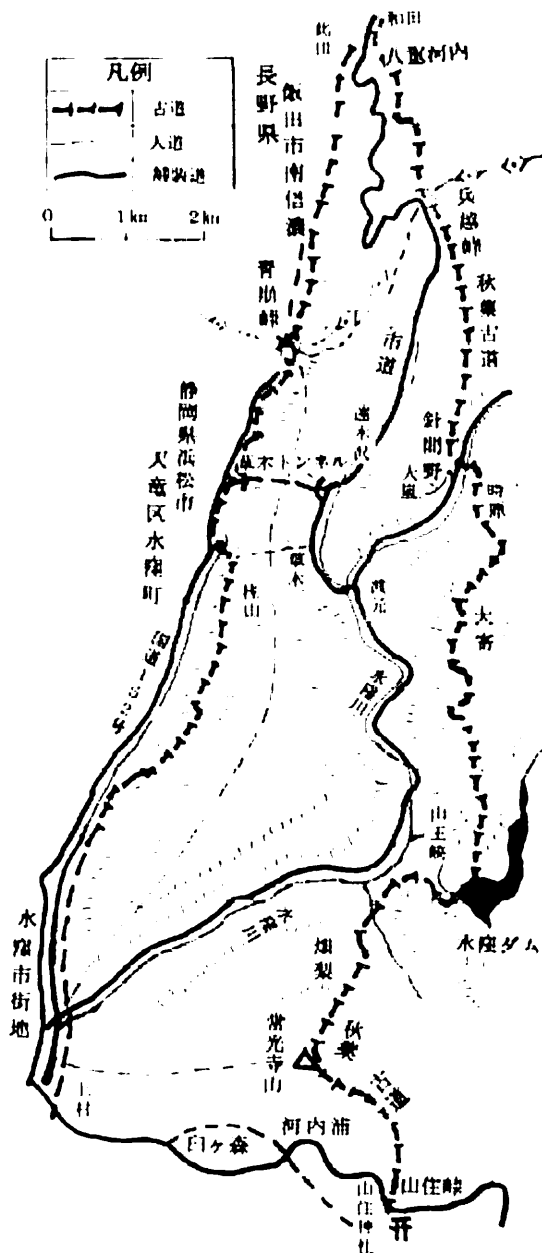


図-4 図-2に続く山住神社から北方の古道  
（作成：中根）

これは、旧畑梨の住人であった坂本孔司氏と、水窪ダムにより家が水没した坂中保男氏の証言、さらに現地踏査の結果による。そのルートは、山住峠～常光寺山～畑梨～大寄（おおより）～時原～針間野（はりまの）～兵越峠～八重河内の此田（このた）で中央構造線と合流するものである。こちらのルートも尾根の道を多用しており、針間野には王子の墓とされる中世の五輪塔があつて古道の証拠品の一つと考えられる。針間野からは昭和初期でも、牛に楮やこんにやく芋を積んで、尾根を通過

此田で売って来た人があつたそうである。針間野と大嵐地区の住居は、戦前まで31戸あつた。現在殆ど廃屋となり、元から住んでいる人は、1人のみである。

また一方、水窪市街地からもほぼ中央構造線沿いに古道が青崩峠を経ていた。青崩峠と兵越峠をつなぐ古道もあつた。しかし、商売とは別の、通報とか進軍のために急を要する場合には、水窪を通らず、図-4の東側コースのように、兵越峠経由で信州へ向かったものと思われる。

上平山・下平山を通る塩の道ルートには、水窪地区切通峡下流に高根城跡があり、上平山で戦もあつたといわれるから、このルートも戦いの道としても利用されたことが推測できる。しかし、この道で数十kmに及ぶ長蛇の隊列には無理があるので、幾つかのコースに分けて進軍したものといわれている。

以上、役割から見て古道を「神体山・黒曜石・信仰・塩・戦い」の道に分けたが、各々専用の道があつたわけではなく、また同じ道でも往来者の目的は色々であり、各種情報も古道を往来したことが推定される。古道の役割には「文化交流の道」もあつた。花祭り・田楽・三河万歳・浪花節などの山伏に関わる芸能の道、冠婚葬祭・郵便・前記以外の参詣など、その用途は千差万別であつたが、古道の多くは山の中で今でも大部分残っている。

#### 4. その他

##### （1）尾根道の事例

秋葉古道沿線にも山の高い所に点々と集落があつたが、そこに住んでいた人達は、猟師や木こり・鉱山・炭焼きの関係者であつたと思われる。通常の生活では谷底まで下りことは少なく、尾根を利用して往き来していた。次に、秋葉古道以外の尾根を通る古道の事例を挙げる。

図-3に示した東西の縄文街道は、縄文早期の遺跡を結ぶルートを示しており、これも尾根の道であつた。文献36)の調査のように、岡崎城一足助地区→信州（飯田市）を結ぶ尾根の道が2本あることや、中世まで遡ることの出来る豊橋市→設楽町→信州へ至る伊那街道も、古い時代ほど高い山腹や尾根を利用している。さらに、中山道の御嵩町→恵那市の間も、現在の川沿いを進む国道19号より数百メートル高い尾根を通過している。これらが代表的な尾根道の事例である。

文献1) および文献36) に記載された愛知県下の32路線の中、21路線が尾根を通る古道である。

##### （2）三遠南信地区の交通事情

人馬の時代は、以上述べてきたような交通事情であつた。静岡県浜松市と長野県飯田市という代表的な両地区を結ぶ近世以降の道は、遠州街道もしくは別所街道と呼ばれ、愛知県東栄町別所を通つた。現在では国道151号と257号になるが、いずれも愛知県を通る迂回コースになっている。国道152号の青崩峠は現在でも車両交通不可能であり、南から飯田市への車輛は、か細い市町村道の兵越

峠を越えている。両地区を往来する車両の多くは、中央高速道路の岐阜県多治見市経由である。

計画では、三遠南信自動車道が浜松市西部から愛知県東栄町を通過して中央構造線沿いに進み、長野県飯田市へつながることになっている。このルートは殆どの区間で、かつての秋葉街道となっている。したがって、「現代の高速道路はまた古道のコースに戻る事例が多い」<sup>37)</sup>という記述とも符合する。しかし、秋葉の峠道は浜松市と飯田市を結ぶ最短距離のコースであっても、標高が高過ぎて延長20km余のトンネルが必要となり、高速道路のルートになり難かった。

## 5. まとめ

古道には、以上に述べたような各種の往来目的がある。なぜ古い道ほど尾根を通ったのであろうか。

①見通しが良いこと。

②敵や獣に対して有利であること。

③乾いていて歩きやすいこと（川の横断が少ない）。

④崖の下を通らないので、落石の危険がないこと。

などの理由が考えられる。

具体的に「見通し」とは敵の様子や、出水状況などのこと。「獣」とは熊・猪・猿・狼、さらにここでは、マムシ・蜂・蛭（ひる）・毒虫などをいう。狼は江戸時代まで日本各地にいた。

それから古道は地形にもよるが、目的地まで登り下りをいわず地図上の最短距離のルートを選んでいる、という傾向が顕著である。

古道の効用として、①現代において、自然に親しみ散歩道として利用できる。②現在使われている河川沿いの道が、洪水や地震などによって通行止めになった場合、災害救助・報告・復旧などに使われることがある。③新しく高速道路をはじめとする幹線道路を造る場合に、古道のルートが参考になる。

古道は他地区にも沢山あるが、それらは草木に埋没し、忘れられつつある。古道の保存方法では、浜北勤労者山岳会が秋葉古道で行っている保存・管理・活用などの自主活動が好ましい。古道の中でも、東海自然歩道に指定されている部分もあるが、地域の自主活動で草刈りをしている地区もある。古道の整備として、むやみに階段を設けたり、重機で改造しすぎても昔の雰囲気が消えるおそれがある。古道と重ねて車道が造成される場合もあるが、過去に重要であった古道は、上記の効用もあるので保存が望まれる。

## 参考文献

- 1) 中根洋治：『忘れられた街道』（下巻），風媒社，巻末位置図，2006。
- 2) 有賀競：『秘境はるか塩の道秋葉街道』，野中賢三，1993。
- 3) 田中元二：『古道案内 信仰の道 秋葉街道』，白馬小谷研究舎，2006。

- 4) 神谷昌志：『天竜川と秋葉街道』，明文出版社，1987。
- 5) 春野町史編纂委員会：『春野町史』（上），春野町，p. 623，1997。
- 6) 天野信景：『塩尻』，（1712《正徳2》年著），明治40年国学院大学，p. 777，1965年復刊
- 7) 田村貞雄：民衆宗教史叢書第31巻『秋葉信仰』，雄山閣，pp. 38, 51，1998。
- 8) 前掲7)，p. 4
- 9) 前掲5)，pp. 612, 616-618, 628
- 10) 前掲6)，p. 6
- 11) 野本寛一：『焼畑民俗文化論』，雄山閣出版，pp. 434, 435, 531，1984。
- 12) 工藤利栄：日本経済新聞（2007年7月9日朝刊）
- 13) 木下恒雄：『秋葉山郷土誌稿』，自費出版，p. 44，1985。
- 14) 木下恒雄：『春野町の地名』，自費出版，p. 98，1987。
- 15) 白川静：『宇統』，平凡社，p. 422，2004。
- 16) 前掲6)，p. 21
- 17) 渡辺妙子：『秋葉山本宮秋葉神社の刀剣』，秋葉山本宮秋葉神社，p. 3，1999。
- 18) 前掲6)，p. 19
- 19) 前掲5)，p. 615
- 20) 前掲6)，p. 18
- 21) 鈴木昭英：山岳宗教史研究叢書9，『富士・御嶽と中部霊山』，名著出版，pp. 202-204，1978。
- 22) 藍谷俊雄：『三尺坊』，秋葉山秋葉寺発行，p. 85，1996。
- 23) 山本義孝：『遠江における山岳信仰の成立』，研究紀要第21号，静岡県博物館協会，p. 55，1997。
- 24) 柳田国男：『定本 柳田国男集第2巻』「東国古道記」，筑摩書房，p. 247，1962。
- 25) 中山慈照：『全国石仏石神大辞典』，リッチマインド出版事業部，p. 152，1990。
- 26) 前掲4)，pp. 184-188，
- 27) 中根洋治：『愛知発巨石信仰』，自費出版，pp. 368-377，2002。
- 28) 木下恒雄：『歩かまい・秋葉街道』，自費出版，p. 350，1992。
- 29) 中根洋治：『愛知の歴史街道』，自費出版，p. 328，1997。
- 30) 前掲5)，p. 639
- 31) 沖和雄：『伊那』，伊那史学会第22巻，「秋葉街道覚え書き」，pp. 9-16。
- 32) 木下恒雄：『編年・春野の歴史』，自費出版，p. 2，1977。
- 33) 前掲5)，pp. 100, 101，1997。
- 34) 前掲24)，p. 246
- 35) 水窪町史編さん委員会：『水窪町史』，水窪町，p. 117，1983。
- 36) 中根洋治：『忘れられた街道』（上巻），風媒社，2006。
- 37) 武部健一：『道のはなし I』，技報堂出版，pp. 6-13，1992。